様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１３日現在

機関番号：１２１０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０１１０
研究課題名（和文）　和文ゴシック体成立と欧文書体との関連性の研究

研究課題名（英文）　A study of the creation of Japanese gothic and the relevance of Latin alphabet typefaces

研究代表者
石川　重遠（ISHIKAWA SHIGETOH）
筑波技術大学・名誉教授
研究者番号：10114232

研究成果の概要（和文）：本研究は、未だ明らかでない和文ゴシック体成立とその書体が欧文書体とつながりが有るかを考察することである。研究の成果：１）和文ゴシック体成立に関して、最初の和文ゴシック活字書体は、明治 19 年（1886）6 月 1 日の官報の外報の小見出しに使われたことが分かった。その官報において、日本の記事と外国の報道を区別する目的があり、和文ゴシック体は、外報の小見出しのためにデザインされた。２）アメリカでの調査により、イギリスで創出されたサンセリフ活字書体は､アメリカでゴシックと命名されたことが分かった。それは、ボストンの活字鋳造所の 1832 年の活字見本帳に見られる。３）このような活字書体は、アメリカから日本に輸入され、明治 9 年（1876）の東京築地活版製造所の活字見本帳に載った。以後、日本語ではこの欧文活字書体をゴシックと呼んだ。４）和文ゴシック体成立とゴシック体との関連性として、当時の外国の官報や新聞で使われた見出しゴシックは、和文ゴシックを生む発想の起源と見なされる。

研究成果の概要（英文）：This study is what the Japanese Gothic creation that is not yet clear and the first typeface consider whether there is a connection with the typeface of Latin alphabet. The result of this study: 1. About Japanese Gothic creation, we clarified that the first Gothic printing type was used for the subheading of the foreign news an official daily gazette of June 1,1886 (Meiji 19). In its official gazette, there was a purpose to distinguish the foreign news from Japanese articles, and the Japanese Gothic was designed for the subheading of the foreign news. 2. By research in U.S.A., We made clear that the Sans serif typefaces created in the U.K. was named Gothic in U.S.A. It is seen in the specimen book of 1832 of the type foundry of Boston. 3. Such printing types were imported from U.S.A. to Japan and appeared in the specimen book of Type Foundry, Tsukiji at Tokyo 1876 (Meiji 9). Those printing type was called Gothic in Japanese afterward. 4. About relevance with the Japanese Gothic creation and Gothic, Gothic typefaces for heading that were used with then foreign official daily gazettes and newspapers are considered to be the origin of the idea to produce Japanese Gothic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード:　和文ゴシック体　欧文ゴシック体　和欧ゴシック体の関連性　書体デザイン
書体史

１．研究の背景

明朝体とゴシック体は、和文書体を代表する２大書体である。これらは創出から今日まで１世紀にわたり日本の活字文化を担い、人々に受け入れられてきた。２つの書体の中で、２０世紀末まで本文組用書体として主に用いられてきた明朝体については、研究の蓄積があり、既にその成立の経緯等が明らかにされている。

それに対してゴシック体は、長年にわたり見出しや文章中の強調文の書体として使用されてきたものの、書体数が少なく、使用頻度が少ないことなどから、この書体の学術的研究は乏しく、その成立の経緯は依然として不明である。

しかし、２０世紀末からゴシック体の新書体開発が急増し、見出し用から本文用書体まで幅広い用途に用いられるようになり、近年の活発なゴシック書体開発とその使用は、自ずとこの書体の起源に対して注目されることとなっている。だが、これまでの和文ゴシック体研究が皆無である状況を見れば、その誕生とそれに関連する物事は分からないのが現状である。

また、和文ゴシック体は、日本独自の発想とデザインで作出された活字書体であることに関しても考察の対象になる。

和文書体の「ゴシック体」と言う名称は、外来の要素がそこに感じられる。この書体は、明治時代の前半に主としてアメリカの印刷術の導入、特に欧文ゴシック活字の輸入と関係があるのではないかという推測があり、その可能性を実証する研究も必要である。

さらに、この研究では、欧文ゴシック体活字の「髭文字」と「サンセリフ」の２つの「ゴシック」体の内、何故サンセリフ体をアメリカ中心にゴシックと呼び、その呼称の活字書体はいつ成立したのかについての疑問の解明にも取り組まねばならない。この名称と書体の形態が和文ゴシック体の成立と重要な関わりを持つことことが考えられることから、是非この研究に加え、和文ゴシック体成立との関連性を考察する必要がある。

ともかく、今、和文ゴシック体の成立の経緯について明らかにすることが待たれている。

２．研究の目的

本研究は、これまで研究されてこなかった和文ゴシックの活字書体成立とそれにおける欧文ゴシック体の影響について、国内外における調査をもとに解明する。

特に欧文ゴシック活字書体のデザインとその発展を検討することによって、欧文書体の影響を看過しがちな和文ゴシック体研究を本研究で行うものである。

上記の視点から、この研究は以下の４つの目的を持つ。

(1)和文ゴシック体成立の背景と目的及び最初の和文ゴシック体に関する調査、考察及び和文ゴシック体が欧文ゴシック体の影響を受けて成立したことを日本側の視点から調査し、考察を行うこと。

(2) イギリスで創出されたサンセリフ体からアメリカで「ゴシック」と呼ばれる書体デザインが生まれ、普及する経緯について調査、考察を行うこと。

(3)１９世紀にアメリカから輸入されたゴシック体活字の調査を行う。これにより和文ゴシック体成立に対するアメリカのゴシック体の影響を明らかにすること。

(4) 上記(1)、(2)、(3)の研究の関連性を検討し、和文ゴシック体成立と欧文ゴシック体の関連性を考察する。

３．研究の方法

本研究は、主題に関する文献、資料等の収集・調査及びその考察が主体となる。したがって、国内外の図書館や古文書館、博物館等で調査を実施し、研究期間内の課題解決を３研究者が各々分担して行なう。

(1) 和文ゴシック体成立に関する文献・資料調査を主として国会図書館近代デジタルライブラリー、印刷図書館、印刷博物館、アド・ミュージアム・オブ・東京、横浜開港資料館等図書等で行った。(担当：石川)

(2) アメリカでサンセリフ体がゴシック体と呼ばれる経緯をコロンビア大学バトラー

図書館所蔵の American Type Founders コレクションにて調査。(担当：山本)
(3) ワシントンDCのスミソニアン博物館が所蔵する１９世紀後半のアメリカの印刷活字書体、特にゴシック体に関する書体の調査を行う。(担当：後藤、山本)
(4) ウィリアム・ギャンブルがアメリカから日本に導入した最初の活版印刷と活字について、アメリカ長老会派教会図書館（フィラデルフィア）にて、文献・資料調査を行う。(担当：後藤)
(5) ワシントンDCのアメリカ議会図書館に所蔵されるウィリアム・ギャンブル・コレクションより、ギャンブルと日本への活版印術導入等に関する文献・資料調査を行う。（担当：後藤）

本研究では、研究者が研究課題に対してこれまでに無い視点で研究課題を捉え、そのための文献・資料を調査し、それらを読み込む時間を多く持ち、多面的な視点を持って慎重に考察することを重要視した。

研究計画では、日本国内の調査は平成 20 年度から平成 22 年度まで３年間行い、日本国外の調査は、平成 20 年度から平成 21 年度までの 2 年間で行う計画を立てたが、国外調査は、調査期間と費用との関係から 3 年間で行うこととなった。

４．研究成果

(1)「和文ゴシック体の成立」の研究成果

①本研究での重要課題である和文ゴシック体の初出の活字書体を調査した結果、それは明治 19 年（1886）6 月 1 日の官報 837 號外報の小見出しに使用されたことが判明した。ただし、5 號サイズのこの活字は、活字見本帳に載っておらず、金属活字であったかどうかは定かではない。木活字で、縦型の国名漢字のロゴタイプであったとも推測できる。このゴシック体は、漢字のみである。

②官報外報のゴシック体を初出和文ゴシックと見なす理由として、当時の印刷活字の使用は明朝体が大半を占め、欧文活字の輸入も盛んになってきたものの、官民の印刷業界では和文ゴシックを創出する発想はなかったと考える。このような状況の中で官報の編集あるいは発行に携わる者によって、官報で外国のニュースを国内の内容と区別するために明朝体でない書体の使用を発案したと考える。和文ゴシック体活字の発想は、当時の印刷書体の使用に対する発言力や実施力・資力のある人や資力のある組織無くして生まれなかったであろう。未だ使用目的の無い新書体を活字化する時代ではなかった。だが官報は和文ゴシック体を生む前述の要素を満たしていた。

和文ゴシック体は何故 5 號相当の活字の大きさであったのかという疑問がある。その回答は、最初の試みとして、外報の本文の 5 号明朝に対応する小見出しに使用する目的であったとしたい。本文と同じ大きさ（号数）であってもこの書体は人目を引く。

官報のゴシック体使用から 5 年後の明治 24 年（1891）に東京築地活版製造所から 5 号活字がゴチック形として活字見本帳で発表され、使用され始めた。この書体は、官報のゴシックと同様の形態的特徴をもっていることから、双方の関連性に対して注目し、考察を深める必要がある。

官報のゴシックは、日本にサンセリフという官製の新しい活字書体をもたらした。

(2)「欧文ゴシック体成立時期」の研究成果

２度にわたるコロンビア大学図書館アメリカ活字鋳造会社寄贈図書の膨大な活字見本帳よりゴシック活字書体の調査とイギリスのセントブライド印刷図書館での調査の結果、アメリカでゴシックと命名された活字の登場は、1832 年であることを確認した。長年の課題である「ゴシック」体の名称の由来は、調査中である。1822 年のアメリカの活字書体見本帳において「ゴシック」と命名した書体を確認したが、それはエジプシャン体の形状をしていた。1822 年から 1832 年までの 10 年間のゴシック体の動向について探る必要がある。

(3)「ゴシック活字の日本導入」の研究成果

①アメリカのフィラデルフィアにあるアメリカ長老会派教会図書館とニューヨークにあるその旧本部で近代活版印刷をわが国へ紹介したとするウィリアム・ギャンブルに関する資料を調査した。

彼の活動と足跡の中に日本での活字製作があり、そこに和文ゴシック体のルーツが隠されているのではないかと想像された。この仮定に基づいてギャンブルを中国へ派遣させたアメリカ長老派教会の図書館で調査を行った結果、ギャンブルが日本での活動の資料を入手し、それを読み込んでいるが、日本での印刷や日本語の活字制作やそれに関すると思われる内容が乏しい。

１つの成果として、残された当時の活字見本帳から、ギャンブルの活躍した 19 世紀中葉からアメリカでは広くサンセリフ書体

が使用されたことが分かった。その書体に「ゴシック」と命名されていることも判明した。ギャンブルの中には当時のアメリカのゴシック体の活字書体の様式を日本語の活字書体として製作が行える態勢を備えていたのではないだろうか。

ギャンブルが所属した上海美華書館刊行の1862年の見本帳では以下の4シリーズの「Gothic」体が掲載されている。それから4年後の1865年の見本帳でも同じ4シリーズのJobbing Fountsに属する「Gothic」が以下の呼称で掲載されている。

Pica Gothic No.2
Two Line Great Primer Gothic Condensed No.2
Six Line Pica Gothic Condensed
Eight Line Gothic Condensed

これらのゴシック体掲載の見本帳は、ギャンブルが慶応4年（1867）に本木昌造の要請で来日して活字鋳造を指導した折持参していた可能性があり、その時にゴシックの活字書体を日本に知らしめたことが予想できる。

(4)「和文ゴシック体成立と欧文ゴシック体の関連性」の研究成果

和文ゴシックの最も早い使用例が官報837號の外報の小見出しである。

日本の官報は、プロシアやフランスなどの官報を参考に作られたとされる。官報の外報の欄にゴシック体を用いた動機は、外国の官報や新聞などの見出しにあろう。当時の内閣官報局の編集部には諸外国の官報、新聞と国内の外字新聞などが収集されており、その中から重要な記事を翻訳し、官報の外報記事にする場合もあり、その際、見出しの必要性、すでにその当時には使用されていたゴシック体の見出しの有用性を認め、日本語のゴシック体創出とその官報への使用を実現させたと考える。明治政府は進取の気性を発揮し、西洋の発展性の有る有望な活字書体を日本文字に取り入れた。

明治10年頃にはゴシック活字が日本に輸入され、官民の印刷関係者に普及が始まり、「ゴチック」などと呼ばれていた。これらの人達の中には、明朝体とは違った欧文ゴシックの書体構成要素を持った日本語版ゴシック体の出現を望む気運が醸成されたであろうことも和文ゴシック体の成立とゴシック体とのつながりを考える上で重要な点である。

(5)研究成果のまとめ

①和文ゴシック体成立に関して、最初の和文ゴシック活字書体は、明治19年（1886）6月1日の官報の外報の小見出しに使われたことが分かった。その官報において、日本の記事と外国の報道を区別する目的があり、和文ゴシック体は、外報の小見出しのためにデザインされた。官報という国政媒体から和文ゴシックは創出された。

②アメリカでの調査により、イギリスで創出されたサンセリフ活字書体は、アメリカでゴシックと命名されたことが分かった。それは、ボストンの活字鋳造所の1832年の活字見本帳に見られる。

③このようなゴシック活字は、アメリカから日本に輸入され、明治9年（1876）の東京築地活版製造所の活字見本帳に載った。以後、日本語ではこの欧文活字書体をゴシック（ゴチック）と呼んだ。

④和文ゴシック体成立とゴシック体との関連性として、当時の諸外国の官報や新聞、国内の外字新聞等で使用された見出しゴシックは、和文ゴシック活字を生む発想の起源となった。特に官製媒体である官報の外報の小見出しの和文ゴシックとゴシック体を結びつけたことは、大蔵省官報局の功績である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①後藤吉郎、イギリスの近代タイポグラフィを顧みる、日本デザイン学会誌デザイン学研究特別号、査読無、Vol.17-2、2010、pp56-61

②山本政幸、欧文タイポグラフィにおける読みやすさの問題、日本デザイン学会誌デザイン学研究特別号、査読無、Vol.17-2、2010、pp68-73

〔学会発表〕（計6件）

①石川重遠、後藤吉郎、山本政幸、創成期の和文ゴシック体、日本デザイン学会第57回研究発表大会、2010年7月3日、長野大学

②後藤吉郎、石川重遠、山本政幸、William Gambleとゴシック体、日本デザイン学会第57回研究発表大会、2010年7月3日、長野大学

③石川重遠、後藤吉郎、山本政幸、和文ゴシック体創出の研究経緯、日本デザイン学会第56回研究発表大会、2009年6月27日、長野大学

④後藤吉郎、石川重遠、山本政幸、William

Gamble の活字研究、日本デザイン学会第56回研究発表大会、2009年6月27日、長野大学
⑤山本政幸、石川重遠、後藤吉郎、アメリカ活字鋳造会社の設立とゴシック体活字の発達、日本デザイン学会第56回研究発表大会、2009年6月27日、長野大学
⑥後藤吉郎、William Gamble の生涯、日本デザイン学会第55回研究発表大会、2008年6月28日、広島国際大学

〔図書〕（計1件）
①後藤吉郎、他、誠文堂新光社、タイポグラフィの基礎、2010、pp38-47

〔その他〕
①石川重遠、和文ゴシック体研究経緯における課題、2009年12月12日、日本デザイン学会タイポグラフィ研究部会九州研究会、九州産業大学
②山本政幸、モダン・サンセリフ活字の発達、2009年12月12日、日本デザイン学会タイポグラフィ研究部会九州研究会、九州産業大学
③石川重遠、和文ゴシック書体初出に関する調査、2009年3月4日、平成20年度科学研究費補助金による研究成果発表会、武蔵野美術大学新宿サテライト
④後藤吉郎、アメリカ長老会派図書館におけるウィリアム・ギャンブルに関する調査、2009年3月4日、平成20年度科学研究費補助金による研究成果発表会、武蔵野美術大学新宿サテライト
⑤山本政幸、コロンビア大学バトラー図書館ATFに関する調査報告、2009年3月4日、平成20年度科学研究費補助金による研究成果発表会、武蔵野美術大学新宿サテライト
⑥後藤吉郎、日本における活版導入期とウィリアム・ギャンブル、2008年11月23日、日本デザイン学会タイポグラフィ研究部会、印刷博物館

６．研究組織
(1)研究代表者
石川　重遠（ISHIKAWA SHIGETOH）
筑波技術大学・名誉教授
研究者番号：10114232
(2)研究分担者
後藤　吉郎（GOTOH YOSHIRO）
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：40076287
(3)研究分担者
山本　政幸（YAMAMOTO MASAYUKI）
多摩美術大学・美術学部・准教授
研究者番号：80304145